



香港の歴史

東洋と西洋の間に立つ人々
ジョン・M・キャロル・著
倉田明子／倉田徹・訳
明石書店／4300円＋税

**香港情勢のいまを
歴史から理解する**

国家安全法制定で「自由を失った」と言われる香港。日本語で初めての香港史の概説書となる本書は、香港が空間としても歴史としても、中華帝国と大英帝国という「二つの帝国」の周縁に位置するがゆえに、常に外部との緊張関係を持ち、内では社会矛盾からのデモ・暴動の連続だったことをバランスよく描き出す。現在の状況と重ね合わせれば、「香港の物語は、常に書き改められ続けるであろう」という最後の一節が重く響く。

平成時代の日韓関係

楽観から悲劇への三〇年
木村幹／田中悟／金容民・編著
ミネルヴァ書房／3500円＋税



**平成の三〇年間、
なぜ対立は深まったか**

平成の初め頃、日韓関係は雪解けに向かい、政治的接近や歴史認識の共有の試みがあり、そして互いの文化受容も進んだ。しかし従軍慰安婦や竹島問題が展開すると、争点は歴史認識や経済問題、安全保障や社会的交流までかつてないほど拡大し、いまや日韓関係は「過去最悪」と言われる。この「平成」の道程は「令和」の日韓関係への教訓に満ちている。政府関係だけでなく、世論や市民団体、メディアが及ぼす影響も分析する良書。

**「大戦の英雄」の陰で
改革に奮闘の
労働党宰相**



クレメント・アトリー

チャーチルを破った男
河合秀和・著
中公選書／2000円＋税

一九四五年、第二次大戦の英雄・チャーチルを破り、選挙で圧勝したアトリー。国内政治では、市民的権利と義務とを調整しつつ戦後イギリスの社会保障政策、産業政策の大改革を主導し、国際政治では、植民地を独立させNATOなどの集団安全保障体系を志向した。チャーチルに「羊の皮を着た羊」と評されながら、現在「戦後最も偉大な首相」とも言われる、英国的社会主義者の信念を貫いたアトリーの生涯に迫る、本邦初の評伝。



歴史秘話 外務省研修所
知られざる歩みと実態
片山和之・著
光文社新書 / 840円+税

終戦直後に立ち上げた 外交官教育の要諦は

多様な利害や価値観が渦巻く国際社会で、外交官の役割はますます重要だ。一九四六年、焦土の東京に作られた外務省研修所は、単に語学や専門知識を教授するだけでなく、外交官に必要な「美德」や「勘」を養い、磨くことを目指した。そこそが新しい日本の外交を支え、かつ外交の「プロフェッショナル」に必要な素養だとする切実なニーズと研修所への結実を著者は丁寧に跡付け、知られざる歴史を明らかにしている。

アジア冷戦が過激化していた一九六五年のインドネシア。スカルノ政権からスハルト政権への政権交代の分水嶺となった九・三〇事件後、共産党員などに対する大虐殺が起こった。インドネシア全体での死者は五〇万〜二〇〇万人とも言われるが、最も激しい殺戮が行われたのが、楽園の島、バリであった。それはなぜなのか？ どうして普通の人までもが虐殺に加担したのか？ 現地ではいまだに人々が忌避しようとする、虐殺の真相に迫る。

楽園の島と忘れられたジェノサイド
バリに眠る狂気の記憶をめぐって
倉沢愛子・著
千倉書房 / 3200円+税



なぜ普通の人たちが 虐殺者になったのか

宇宙から艦隊の動きを丸裸にする大量の小型衛星群、鳥の大群のようにイーッと艦に襲いかかるA-1実装ドローン、絶対に撃墜できない「極」超音速兵器……。コロナ禍が浮き彫りにした米中の競争状態は、宇宙、AI、そしてミサイル防衛の常識を覆す新兵器の開発といった領域に波及している。従来の防御技術が無効化し、世界が攻撃優位へと傾くとき、国家はどう生き抜くのか。近未来の戦いを鋭く描く。

先端技術と米中戦略競争
宇宙、AI、極超音速兵器が変える戦い方
布施哲・著
秀和システム / 2400円+税



先手必勝の新しい戦争 問われる国家の意思